

# 児童期・青年期における仲間関係の排他性に関する研究 - 対人受容性と仲間集団の閉鎖性に着目して

-

|        |   |
|--------|---|
| 著者     | 松本 恵美   |
| 号      | 63  |
| 学位授与機関 | Tohoku University   |
| 学位授与番号 | 教博第201号   |
| URL    | <a href="http://hdl.handle.net/10097/00126284">http://hdl.handle.net/10097/00126284</a> |

まつもと えみ  
松本 恵美

学位の種類 博士（教育学）

学記番号 教博 第 201 号

学位授与年月日 平成 30 年 7 月 18 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
総合教育科学専攻

学位論文題目 児童期・青年期における仲間関係の排他性に関する研究  
—対人受容性と仲間集団の閉鎖性に着目して—

論文審査委員 (主査)  
教授 本郷 一夫 教授 工藤 与志文  
准教授 神谷 哲司  
准教授 深谷 優子

## 〈論文内容の要旨〉

一般に、明確な仲間集団を形成する児童期中期以降、自集団の基準に合わない他者に対する排他性が増加することが知られている。仲間関係の排他性が高まることにより、いじめや仲間外れといった問題が起こり、児童・生徒の社会性の発達や対人関係の発達が阻害されると考えられる。そのため、仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因を明らかにし、仲間関係を良好に保っていく方法を検討することは重要な課題であると言える。そのような観点から、本研究は、児童・生徒の仲間関係の排他性に影響を及ぼす諸要因を明らかにすることを第 1 の目的とした。また、排他性に影響を及ぼす個人内要因である対人受容性に着目し、対人受容性の形成に影響を与える要因を明らかにすることを第 2 の目的とした。

本論文は 3 部から構成される。

第 I 部では、仲間関係の機能、仲間集団の発達、仲間関係の排他性に関する先行研究を概観した。その上で、従来、仲間集団の排他性に影響を及ぼす要因として、個人間要因と個人

内要因の両方の要因を取り上げた研究が少ないことを指摘した。また、個人内要因については仲間集団の評価と関連している要因のみが着目されてきたことを問題点として指摘した。そこで、本研究では、個人間要因である「仲間集団の閉鎖性」と個人内要因である「対人受容性」を同時に取り上げることにした。また、対人受容性に関する先行研究が少ないことを指摘し、対人受容性に影響を及ぼす要因として、「他者との関わり経験」、「興味・関心の広さ」、「知識の広さ」を取り上げ、これらの要因間の関係を含めたモデルを提案し、検証することにした。

第Ⅱ部は5つの研究を通して児童・生徒の仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因および対人受容性に影響を及ぼす要因について検討した。

研究1では、小学4、6年生を対象に対人受容性および仲間集団の閉鎖性を測定する尺度を作成した。その結果、対人受容性尺度は、児童の対人受容性を測定する尺度として適切であるが、仲間集団の閉鎖性尺度は修正する必要があることが示唆された。

研究2では、研究1の対人受容性尺度をさらに改善した上で、小学5年生と中学2年生を対象に対人受容性に影響を及ぼす要因について検討した。その結果、他者との関わり経験と興味・関心の広さが影響を及ぼしていることが示された。知識の広さの影響については有意傾向のみが示された。その原因として、特定の領域に関する専門的な知識が十分に考慮されていなかったことが考えられた。

研究3では、特定の領域に関する専門的な知識とその領域における受容性との対応関係を明確にした上で、対人受容性に影響を及ぼす要因について再検討した。その結果、研究2と同様の結果が示され、対人受容性には他者との関わり経験および興味・関心の広さが影響を与えていることが確認された。知識の広さについては、項目を改善しても対人受容性との関連は示されなかったため、知識の広さが対人受容性に与える影響の程度は小さいことが示唆された。

研究4では、研究1の仲間集団の閉鎖性尺度を改善した上で、小学5年生と中学2年生を対象に仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因について検討した。その結果、仲間関係の排他性に対人受容性が負の影響、仲間集団の閉鎖性が正の影響を与えていることが明らかになった。しかし、仲間集団の閉鎖性尺度のいくつかの項目において修正の必要性が示唆された。

研究5では、研究4の仲間集団の閉鎖性尺度を改善した上で、仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因について再検討した。また、対人受容性に影響を及ぼす要因については、要因として「自尊感情」を追加して再検討を行った。その結果、研究4と同様の結果が示され、対人受容性と仲間集団の閉鎖性が仲間関係の排他性に重要な影響を与えていることが改めて確認された。しかし、自尊感情については、対人受容性への正の影響が示されたものの、その影響は小さいことが示唆された。

第Ⅲ部では、研究1から研究5の結果を踏まえて、仲間関係の排他性に影響を与える諸要因の関連をモデルとして提示した。すなわち、個人間要因である仲間集団の閉鎖性と個人内要因である対人受容性の両要因が仲間集団の排他性に影響を与え、さらに他者との関わり経験と興味・関心の広さが対人受容性に影響を与えるというモデルである。なお、このモデルは頑健性が高く、さらには児童期にも青年前期にも適用可能であることが確認された。

これらの結果を踏まえ、児童期・青年期の仲間関係の排他性への介入として対人受容性を高めるという個人への介入と仲間集団の閉鎖性を低めるという個人を取り巻く環境への介入の両方が必要であることが提案された。最後に、今後の発展として、モデルのさらなる精緻化、介入方法や介入効果の検討、および幅広い年齢を対象にした発達的变化の検討が望まれることを指摘した。

## 〈 論文審査の結果の要旨 〉

仲間 (peer) とは、一般に、同年齢の対等な関係をもつ他児と定義される。仲間は、親と同様に、子どもの社会性の発達に影響を与える「社会化のエージェント」として重要な役割を担う。とりわけ、児童期・青年期以降においては、その重要性が増すことが指摘されている。一方、児童期・青年期では、仲間集団の閉鎖性が高まる傾向がある。凝集性のある仲間集団は、子どもの自己認識の形成や社会的慣習の獲得などにとって必要である。しかし、集団の閉鎖性が高くなりすぎるといじめなどの問題を引き起こし、子どもの発達に否定的影響を及ぼすことになる。そのような観点から、本研究は、5つの実証的研究を通して、児童期・青年期の「仲間関係の排他性」に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。

本研究は、大きく次の2点において評価される。第1に、独立変数として個人内要因と個人間要因を同時に考慮したモデルを提案し、検証した点である。従来、児童期・青年期における仲間関係の排他性に関する研究は、もっぱら児童・生徒の心的特性 (個人内要因) あるいは児童・生徒の所属する集団の特徴 (個人間要因) のどちらかを独立変数として取り上げ、その影響力を明らかにしようとするものが多かった。しかし、本研究では個人内要因として「対人受容性」、個人間要因として「仲間集団の閉鎖性」を同時に取り上げ、その両要因が「仲間関係の排他性」に及ぼす影響を発達的に検討した。第2に、独立変数である「対人受容性」に影響を与える要因として、「他者との関わり経験」と「興味・関心の広さ」の影響を明らかにした点である。これは、単に独立変数に影響を与える要因の記述を超えて、今後の仲間関係の支援に関する方法論を提案したものとして評価できる。

しかし、残された問題もある。すなわち、児童期から青年前期にかけて、従属変数である「仲間関係の排他性」が増加するにもかかわらず、独立変数である「対人受容性」と「仲間集団の閉鎖性」の寄与率があまり変化しないという点についての解明である。この傾向は複数の研究を通して確認された頑健な結果であることも踏まえさらに詳細な検討が求められる。なお、この点については、本研究のような記述的研究ではなく、今後の介入的研究の成果を踏まえて検討されるべき課題だとも言える。

以上の問題点を持ちながらも、本研究は、発達心理学の分野に、児童期・青年期の仲間関係の発達と排他性の形成に関する知見を付け加えるとともに、仲間関係の支援の方向性を新たに提案したものと評価できる。

よって、本論文は博士 (教育学) の学位論文として合格と認める。